ボンヘッファーについての一考察

研究生　南部　千代里

ヒトラー暗殺組織に属していたボンヘッファーは、一九四三年国防力阻害の罪名で秘密警察に逮捕され、刑務所の独房に送られたドイツの神学者であり牧師であった。約一年半後、暗殺計画は実行された。だがヒトラーは軽傷だった。一九四五年四月八日裁判が開かれ、ボンヘッファーの死刑が宣告された。翌未明、刑は執行された。享年三九歳であった。その三週間後、ヒトラーは自殺した。そして一週間後の五月七日、ナチスは崩壊した。

ボンヘッファーは、生前、獄中から弟子ベートゲに送った書簡に「神が人びとに信じられなくなることで、はじめて、神との新しい関係が築かれ得る」と綴っている。ボンヘッファーのいう「神」とは、われわれを棄てるものである。つまり人は、絶望的状況におかれた時、神から棄てられて、はじめて「神」との関係が築かれるというのである。なぜならば、彼のいう「神」は、いつも急場を救う《機械仕掛けの神》ではないからである。《機械仕掛けの神》は、人が窮乏にある時、それに応答して、神の力を示す。だが、既にこのような啓示的神を信仰する時代は脱却した、もはや人は人生問題に対する答え、窮乏や矛盾の解決を神に求めない「成人した世界」に生きている、とボンヘッファーは言うのである。ゆえに「限界状況」に陥っても神に救済を求めないこの者と、「僕たちをこの世に生かしてくれる神」との新しい関係は、「神なくして、神の前に、神と共に生る」ものなのである。だからボンヘッファーは、誤った神観念を取り去るため、伝統的キリスト教が仮定してきた神はもとより『新約聖書』の重要な概念を、この世的に釈義する新しい神学を構築しようとしたのである。だがそれは、彼の処刑をもって中断されたのである。

キリスト教文化圏において近代まで信じられた神は、ニーチェが言う如く死んだのである。だが人間は生きている。だから人間は神なしで生きているのである。これは、ボンヘッファーが「イエスとの出会いは人間の一切の価値観の逆転を意味した」と言う如く、既にイエスよって逆説的信仰は知らされている。イエスは十字架上で「わが神、わが神、汝何ゆえ我を見棄てたもうや」（マルコ15章）、「神」から棄てられたと叫び、死んだのである。そのイエスの教えに身を投じたボンヘッファーも、絶望的状況に立った時「神」から棄てられる。奇蹟は起こらないのである。では彼は、否神／無神論者なのであろうか。そうではない。彼は「善きサマリア人」（ルカ10章）の喩話の如く、瀕死の同胞（ユダヤ人）を見て見ぬふりをして通り過ぎることができたあの祭司にはなれなかったのである。ゆえに、ユダヤ人解放を目的としたヒトラー暗殺計画に加担したのである。しかし牧師が、如何にヒトラーが極悪人といえども信仰を盾に暗殺して善いのであろうか。だがこれは、善

悪の問題ではないのである。二つの悪しかない中から、一つの悪を選んだのである。

ボンヘッファーは、伝統的キリスト教が仮定してきた神はいない、それを「認めることなしに正直であることはできない」と言った。それが故に、彼をキリスト教会への反逆者と批判する者は現在もいる。だが、彼が戦時下の獄中で身をもって勝ち取った在と不在の二重性としての「神」理解と、現代人は社会科学の進歩によって「成人した世界」に生きているという概念は、戦後、キリスト者だけでなく、宗教に関わる多くの者たちに、如何なる「神」を考えることができるのか、また人間は如何に生きるべきかを、真摯に考えさせる契機となった。この意味において、彼の思想は60年代のポスト・モダン（神学における）を先駆けていた、と言えるのではないだろうか。